

スクールカウンセラー との連携方策

お茶の水女子大学・発達臨床心理学コース准教授

(臨床心理士)

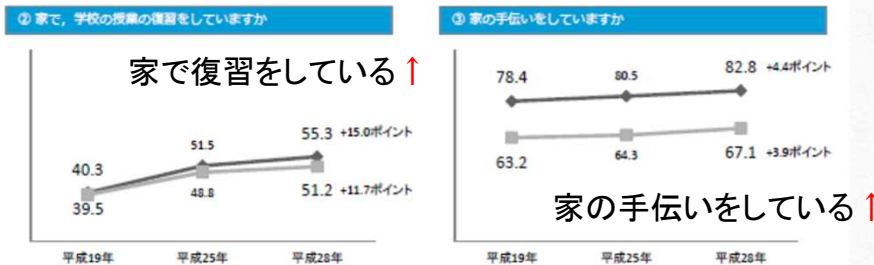
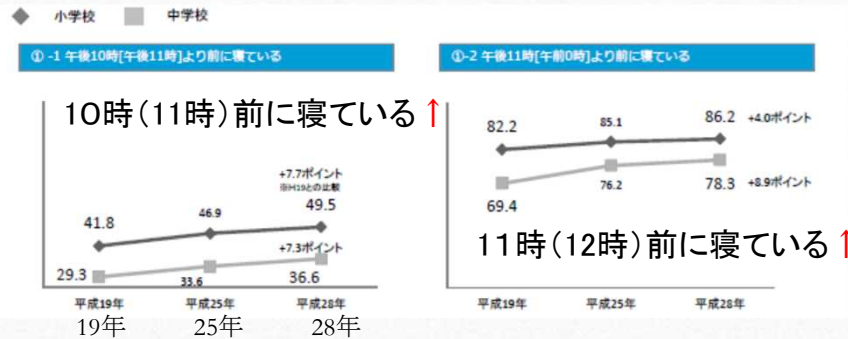
伊藤亜矢子

学校生活から見た“子育て・子育ての困難”

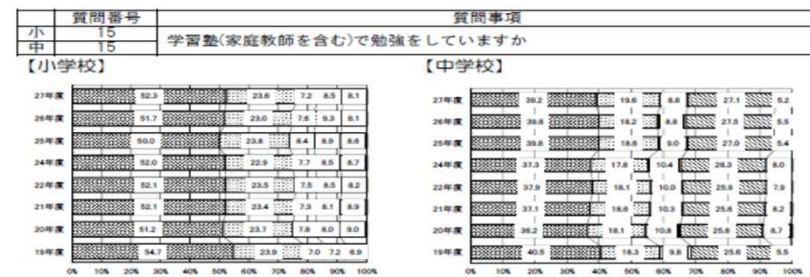
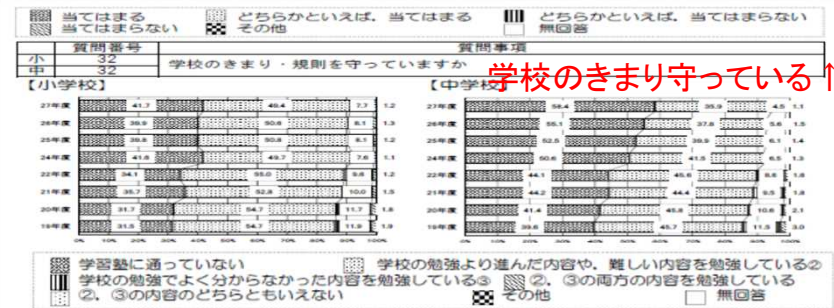
家庭生活や社会環境の変化から子どもの育ちが難しくなっている

(H24年家庭教育支援の推進に関する検討委員会報告書)

早寝・手伝い・家庭学習いずれも微増 学校の規則も守る子ども達
高い通塾率(全国平均で中学校6割)(家庭の教育力低下と言えるだろうか)



NIER平成28年度全国学力調査概要
<http://www.nier.go.jp/16chousakekkahoukou/16summary.pdf>



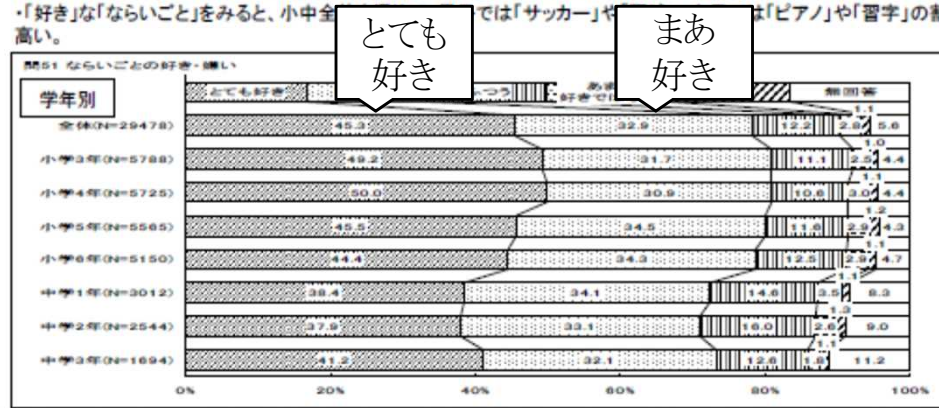
NIER平成27年度全国学力調査概要
<https://www.nier.go.jp/15chousakekkahoukou/hilights.pdf>

・・・教育力は低下していなくても・・・ 子どもの生活の変化と困難①

塾・ならいごとは、子どもの居場所という面も。しかし生活には負担。塾で深夜の帰宅も。

Ⅰ. ならいごと

「平成19年11月中にならいごとをしていた子ども自身」の好き・嫌い
 ・「好き」(とても好き+まあ好き)とする子どもは、小学生では各学年とも約8割、中学生では各学年とも約7割強。
 ・逆に「嫌い」(あまり好きではない+嫌だ)とする子どもは、小中全体を通じて、各学年とも3~4%。
 ・「好き」な「ならいごと」をみると、小中全では「サッカー」や「ピアノ」や「習字」の割合が高い。

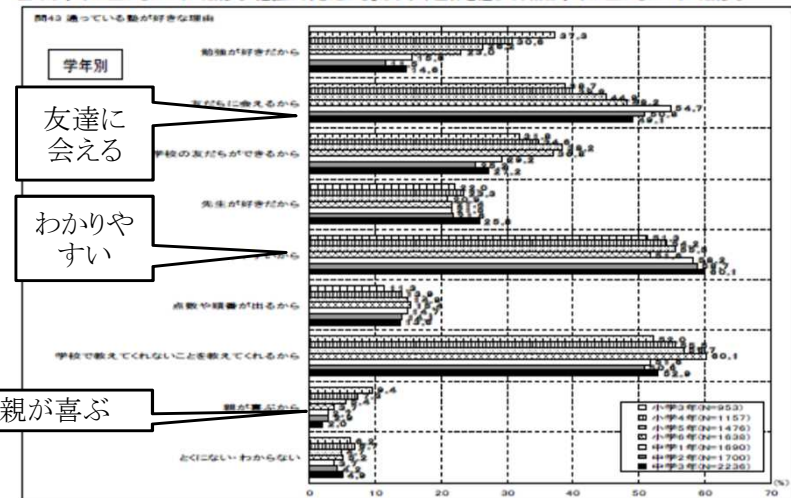


・通い始めた時期は、小中全体では「就学前」が57.3%と最も多く、女子の方が比較的早くから始めている。

② 好きな理由

ア. 学習塾

・小中ともに「先生の教え方がわかりやすいから」や「学校で教えてくれないことを教えてくれるから」がどの学年とも5割以上。
 ・「友達に会える」は、中学生の方が小学生より割合が高いが、小学生では学年が上がるにつれて増加するのに対し、中学生では学年が上がるにつれて減少。「勉強が好きだから」は、小中全体を通じて、概ね学年が上がるにつれて減少。

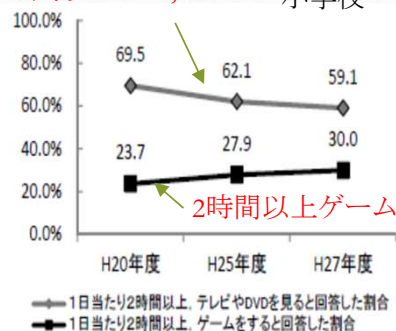


■■■教育力は低下していなくても■■■ 子どもの生活の変化と困難②

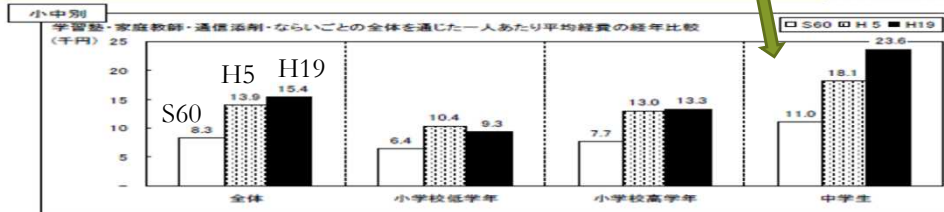
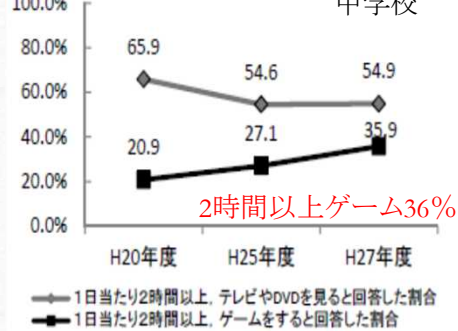
ゲーム、ネット、スマホ・・・体験の狭さ (ラインからインスタグラムへ(岩宮,2016)。一瞬の世界)
家庭教育の負担⇒家庭の格差・地域の格差、親子の焦りや行きづまり

塾等の平均経費
S60→H19年で2倍

2時間以上TV,DVD 小学校

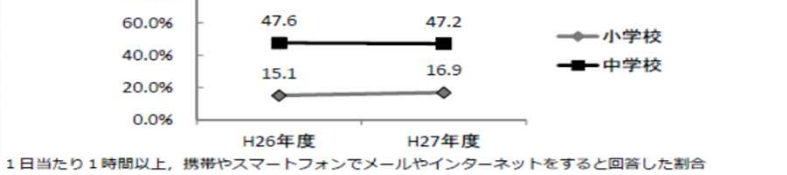


中学校



○ 昭和90年調査・平成5年調査の経費は複数ヶ所での学習活動を全て含めたものであり、今回調査ではそれぞれ主なもの1ヶ所(又は一人)に対する月謝から集計しているため、比較する上では留意(特に「ならいごと」)する必要があります。

1時間以上メール、インターネット(中学生約5割)



NIER平成27年度全国学力調査概要
<https://www.nier.go.jp/15chousakekkahoukoku/hilights.pdf>

才、都市階層別

- 都市規模が大きいほど通塾率は高くなる傾向がみられる(小都市:32.5%→大都市A:41.3%)。
- 大都市Aと小都市の平均月謝を比較すると、通信添削のみは都市の規模による月謝の差はほとんどみられないが、それ以外は大都市Aの方が高くなっており、学習塾では約7,500円、家庭教師では約5,000円、ならいごとでは約1,600円の差がみられる。
- (注)大都市A:政令指定都市+東京都特別区、大都市B:30万人以上、中都市:10万人以上30万人未満、小都市:10万人未満

力、将来進ませたい学校の段階別

- 将来進ませたい学校の段階をみると、全体では「大学・大学院まで」が52.2%と約半数であり、男女別にみると、男子では60.5%、女子では44.3%となっている。なお、女子では「短大・高等専門学校まで」とする割合も21.0%となっている。
- 親の意識経済力の影響**
- 「大学・大学院まで」進ませたいとする保護者の子どもの場合、88.2%が「何らかの学習活動をして」おり、**中学・高校まで**とする保護者の子どもの56.0%と比べると、30ポイント以上の開きがみられる。
- 経年では、特に「大学・大学院まで」進ませたいとする場合の通塾率が上昇(S60:30.9%→H19:43.2%)。

MEXT平成20年子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/08/_icsFiles/afieldfile/2009/03/23/1196664.pdf

・・・学校での家庭教育支援で必要になっている事

多様な価値観、多様なライフスタイルへの理解と対応・・・ VS 見えにくい多様性 (個人と学校をつなぐ)

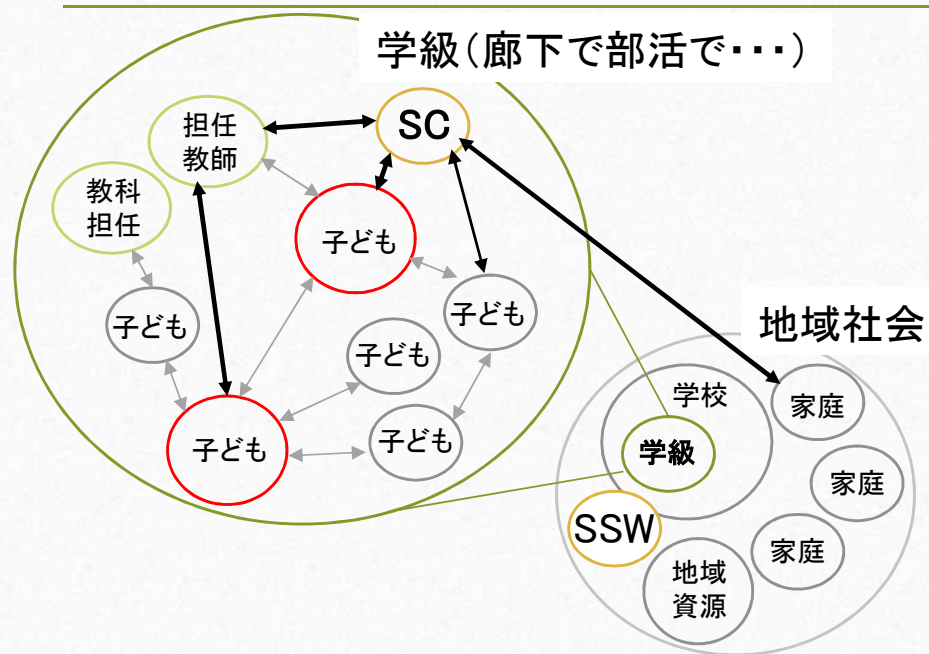
- 父母の身体疾患、精神疾患、リストラ、事件事故災害等により家族生活が**慢性的に綱渡り**状態にある家族
- 海外にルーツを持つ家庭、帰国の家庭など、日本の**学校文化に不慣れ**だったり、異なる学校観を持つ家族
- 新たな就労形態や雇用形態の変化、新しい職業等により、**生活リズムが定まりにくい**家族
- ステップファミリー等、家族の**再編過程**にある家族
- そのほかにも、さまざまな家庭があり、**学校は、多様な価値観、多様なライフスタイルの家族の集まり**という実態
- しかしどうしても大人は、“従来の”家族像や、学校と家族の関係を基本にして、**家族を理解しようとしてしまう。**
- 子どもや保護者自身も、**多様性に気づかない**場合もある。
- あるいは、無理に“従来の”家族に近づこうとしたり、そうでないことに大きな負い目を感じたりする場合もある。
- 制服や集団生活の規律によって**多様性が見えにくい**面も。
- 多様な実態に反して、**狭い進路イメージ**、学力学歴信仰。
- **学校移行や、進路選択**などで、はじめて“違い”に直面して、**混乱したり窮地**に陥る子どもも少なくない。
- 地域で緩やかに子どもを見守る大人、励ましてくれる大人、保護者の苦労を分かちあう人の大切さ

長期的な見守りと、それによる循環的人材育成

スクールカウンセラー(SC)にできること①

家庭・学校・地域の連携、いじめ予防・・・学校で支援することの意味

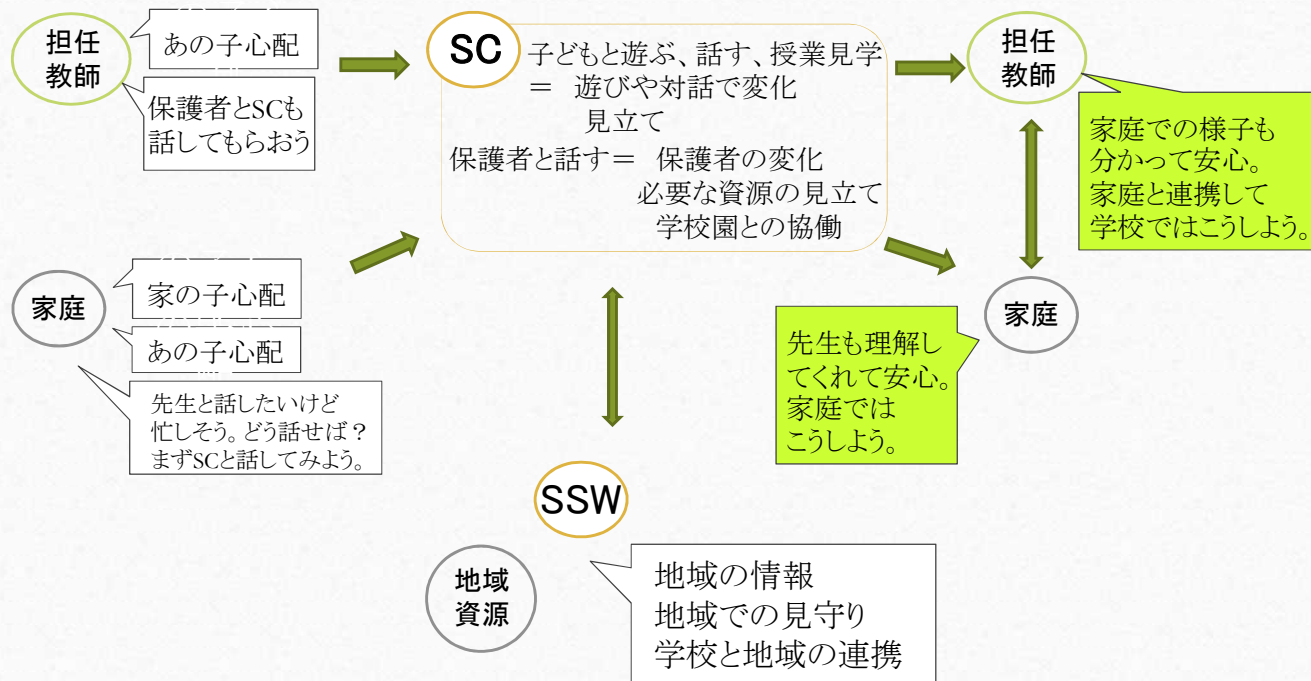
コミュニティ・アプローチ＝環境と個人の相互作用やコミュニティメンバーの力、予防成長促進を重視
教師と協働してのマイクロ・マクロなアプローチ＝心を通して環境づくり



- 学校には多くの援助資源、コミュニティとしてのネットワーク
- 子どもへの個別面接で子どもの力を高める
- 教師コンサルテーション、保護者面接などで、
学校と家庭をつなぐ(相互の理解協力の深まり)
- 教師とSCの連携協働で、校内の子ども理解が深まる＝子どもへのまなざしや関わりが変わる＝学校環境の支援の力
- 学校や学級の風土がより肯定的になる
- いじめや不登校の予防、解決
- さらに地域資源との連携、SSWを含む学校内外の組織的協働

スクールカウンセラー(SC)にできること②

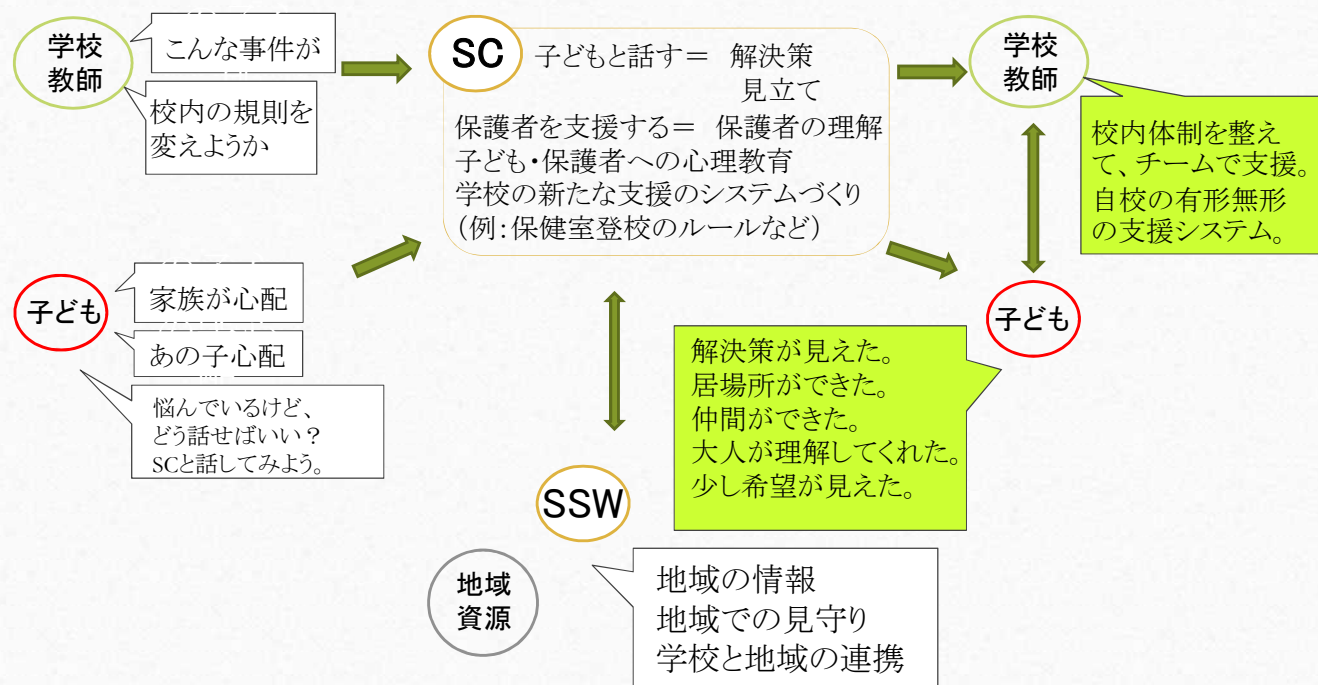
具体的には: 学校のスタッフとして、教職員と連携して子ども家庭支援
コミュニティ・アプローチ=環境と個人の相互作用やコミュニティメンバーの力、予防成長促進を重視
教師と協働してのミクロ・マクロなアプローチ=心を通して環境づくり



- 学校と家庭の連携で、子どもが落ち着く。クラスが落ち着く。
- 学校からの情報で家庭が気づく
- 家庭や地域からの情報や見守り
- 保護者会や保護者研修会での啓発
- 保護者茶話会や保護者チームによる相談室整備 = 子ども学校支援
- 教員研修会でのチーム力アップ
- 地域懇談会や児童館などと連携して地域の研修会
- 校内の支援会議・生徒指導会議
- 要保護児童対策地域協議会(児相)

スクールカウンセラー(SC)にできること③

具体的には: 学校のスタッフとして、校内のシステムづくりや心理教育、側面からの進路指導
コミュニティ・アプローチ=環境と個人の相互作用やコミュニティメンバーの力、予防成長促進を重視
教師と協働してのマイクロ・マクロなアプローチ=心を通して環境づくり



- 中学校や高等学校など、年齢が上がるにつれて、**思いがけない事件事故**も。**進路の問題**も出てくる。
- 子どもの気持ちを支える**進路支援**
- 学校からの情報発信や授業による、**心理教育による予防的な支援**。
- 家庭と学校の連携で、子どもが落ち着く。学校が落ち着く。
- **学校と子どもの実態に合わせた支援体制・ルールづくり**
- 学校の**チーム力、支援力のアップ**

SCに会いに
来ました!

スクールカウンセラーとの連携方策

お母さん
良い機関が
ありますよ!

**心理の専門性(関係づくり=繋がりにくい心をつなぐ。見立て=理解)を
家庭教育支援にどう活かすか⇒顔の見える情報共有/連携協働の機会を**

現状

- 平成7年(1995年)活用調査研究開始。
- 約25500校に配置/臨床心理士等
- 週1回/7時間45分/年間38回
- 勤務様態は地域差が大
- 子どもからの相談だけでなく、**教師コンサルテーション/コラボレーション、保護者支援、地域連携**など。
- **教育センター、医療機関、保健センター(保健師)との連携**は、臨床心理士同士など専門性が特に活かせる。
- 塾、民生・児童委員、福祉事務所(生活保護担当SW)、子ども家庭支援センターなどとの連携も。
- **心理教育や支援システムづくり**なども。
- 心理(個人のミクロな世界)の変化を通して、環境(マクロ)に働きかける。支援者をつなぎ、好適な環境づくり。

難しさと課題、工夫

- 「相談室での個人臨床」という誤解=SCから積極的にアプローチ
- 勤務時間の不足=先生方との連携協働
- 学校に来られない児童生徒=電話手紙+**地域での関わり**
- 支援を求めづらい家庭(多忙・不信・傷つき・生活の困難)
=心理面からの地道な支援+**地域での関わり**
(電話で話す、先生の家庭訪問の後方支援同行、地域連携)
- 早期発見未然防止=リスクのある子どもの情報を先生方と発見共有+守秘を考慮した上での**地域からの情報、地域資源の紹介**
- **父母の会、PTAとの連携**=SC通信、茶話会、研修会

**SC心理の専門性を活かして地域資源と学校をつなぐ窓口
地域資源との連携機会(情報共有の定期的な機会を!)**

